



只見短歌会

八月詠草

大塚栄一

指導

それぞれの緑を重ね茂り合ふ木々寄りあひて山深くなる

小倉キミ子

障害をかかへる人の教室で高齢の身も笑顔で集ふ

関谷登美子

母親の誕生日に花を選ぶ子の良き感性に心踊りぬ

新国由紀子

咲きつぎし窓の朝顔萎え初めて今日より孫は二学期迎ふ

古川 英子

救急車は同年配の老と聞き友らと畑に案じ合ひ居り

渡部ゆき子

長き梅雨漸く明ける茶の間にて一きは太き蟬の声聞く

馬場 八智

苛めよりわが救ひしと村人に五十余年経て礼を言はるる

目黒 富子

知恵遅き息子にあれど知り人に会へば必ず頭下げゆく

五十嵐夏美

小川にて遊べる孫は色のつく小石を拾ひて我に見せくる

渡部ヨリ子

デイケアに通ひし夫の逝きし後名前の残るタオルをたたむ

新国 洋子

只見俳句会

九月例会

目黒十一

指導

山あれば溪あり楽し郷の秋  
栗飯を作りし母を想い出す

邦 夫

赤トンボ紙ひこうきと並んでる  
青蛙蟬を食べるか沼の淵

信

寸断のままの鉄橋灼けており  
亡き友は渡り終えたか天の川

笑 羊

夕影や池に尻打つ鬼ヤンマ  
頬撫でる風の匂いや秋近し

藤 彦

舞茸の出場所を誰に言い置きし  
次々に匂友逝きたる秋寂し

リウコ

友逝きぬ一期の旅は蝉しぐれ  
朝の雨上がり谷間に秋の虹

又壺歩

部屋の隅に残暑の溜る夕べかな  
見納めの兄の筆跡秋の風

一 穂

新涼や村一望の五反幡  
窓ぎわに竹箕置かるる今日の月

恒 夫

上下して行き交う雲や秋の天  
朝寒や布団蹴飛ばす子等に掛け

都

青空やそよぐ初風ペダル踏む  
稲穂波遜色のなし学校田

吉 児

沢菜菜よ渋さの後の無口なる  
溝蕎麦やあなおそろしき深みあり

洋 子

ぼっくりと姉の旅立ち大花野  
着古るせど吊す制服うら盆会

邦 男

夏草や開発と言ふ人家跡  
隣から隣へつづく水澄めり

礼